

Stephen Crane の *The Red Badge of Courage* について

——ある兵士の肖像——

飛 弾 知 法

1

The Red Badge of Courage (1895)は、Stephen Crane の作品としては珍しく出版当時から高く評価されてきた作品である。南北戦争に背景を求めているので戦記小説には違いないが、歴史的な関連性を想起させるような地名や人名が極力排除されているので戦意高揚的な意図は薄く、全編徒労と消耗に満ちた戦闘場面に終始しているわりには厭戦的な雰囲気も感じられない。作者は前作 *Maggie : A Girl of the Streets* (1893) の中で大都市のスラム街における若者の生態を克明に観察したように、*The Red Badge of Courage* でも戦場という特異な状況に放り込まれた一兵士の行動をこまやかに描出しているのである。ただ前者では Jimmie と Maggie の兄妹の対照的な生き方が作者自身の冷徹な視点の中に一貫して捉えられていたので、読者は常に一定の距離を持ってそれに臨むことが出来たが、後者では物語の冒頭で一人の若い兵士の内面に導き入れられると、否応なしに彼の内なる葛藤に付き合わされることになる。*The Red Badge of Courage* の文献の数は Crane の作品の中でもずば抜けて多いが、その殆どがこの兵士の心の遍歴の解明に終始しているのもそのためであろう。

物語は後世の映像的な技法の出現を予告するようなロング・ショットで始まる。

The cold passed reluctantly from the earth, and the retiring fogs revealed an army stretched out on the hills, resting. As the landscape changed from brown to green, the army awakened, and began to tremble with eagerness at the noise of rumors. It cast its eyes upon the roads, which were growing from long troughs of liquid mud to proper thoroughfares. A river, ambertinted in the shadow of its banks, purred at the army's feet; and at night, when the stream had become of a sorrowful blackness, one could see across it the red, eyelike gleam of hostile camp-fires set in the low brows of distant hills.¹⁾

さすが中・短編小説の名手だけあって鮮やかな書き出しである。ロング・ショットで捉えられた戦場の俯瞰の中に兵士たちの置かれた状況が実に簡潔に描き出されている。冒頭の一文はただ夜明けの霧が晴れて丘の上で休息していた軍隊がその姿を見せ始めたことを伝えているだけのようだが、“reluctantly”とか“retiring”などといった副詞や形容詞のいかにも生物を意識させる用い方は、あたかも自然が一つの意志を持って兵士たちに対座しているかのような印象をもたらす。それにこれはこの小説の著しい特色の一つだが、あたりの景色の変化が彼らの内面に微妙な心理的影響を及ぼすようになる。兵士たちが体を震わせるのは早朝の寒気のためだけでなく、自分たちの運命を支配することになる噂のためでもあった。次第に形を成してきた道路はやがて彼らが行軍することになる運命の道だ。土手下のくらがりや夜の闇は死への不安を駆り立て、対岸の丘の中腹にきらめく敵陣の赤い眼のような光は、死そのものの象徴となる。

物語はこのあと起き出してきた兵士達によって部隊の移動の噂がいろいろに取りざたされるが、そのなかに仲間の様々な意見に熱心に耳をかたむけていた若い兵士がいた。それがこの小説の主人公で、読者はやがてこの兵士の内面に案内され、爾来彼の心の遍歴に付き合わされることになる。彼の名は Henry 某。Henry という名前はあとの対話の中で繰り返し登場するが、彼の姓が Fleming

だと分かるのは実に物語の中程にあたる第 11 章に入ってからのことである。これは決して Crane が奇をてらったことではない。彼の作品では登場人物は職業とか体の特徴などで呼ばれることが多く、実際に名前が表示されるのはごく一部の者に限られている。それも Jimmie とか Johnnie などといった通り一遍の名前がどの作品でも繰り返し用いられているだけだ。Henry Fleming という若い兵士は決して個性のない人物とは思えないが、作者は彼の名前の頻出を極力排除することによって、彼の戦場での初体験をすべての若者に普遍化させようとしたのであろう。その意味では彼と同じ隊にいる Wilson と呼ばれている大声の兵士や Jim Conklin という名ののっぽの兵士もまた同様である。

こののっぽの兵士がもたらした部隊の移動の噂や、攻撃とか進軍についての他の兵士たちの議論をたっぷりと聞かされた後で、若い兵士は自分のテント小屋の中へ身を隠すようにして入って行く。彼はその中で入隊以来ひどく心を痛めていたある問題について考えてみようとしたのだ。一見ただの兵舎にしか思えないようなこの小屋の中が、若い兵士の内なる世界をも暗示しているのである。

He lay down on a wide bank that stretched across the end of the room. In the other end, cracker boxes were made to serve as furniture. They were grouped about the fireplace. A picture from an illustrated weekly was upon the log walls, and three rifles were paralled on pegs. Equipments hung on handy projections, and some tin dishes lay upon a small pile of firewood. A folded tent was serving as roof. The sunlight, without, beating upon it, made it glow a light yellow shade. A small window shot an oblique square of whiter light upon the cluttered floor. The smoke from the fire at times neglected the clay chimney and wreathed into the room, and this flimsy chimney of clay and sticks made endless threats to set ablaze the whole establishment.²⁾

前半は如何にも前線の兵士の宿舎らしく描写されているが、それと打って変わって後半のシュールな光景は明らかに主人公の内面の混乱を想起させる。テントの屋根を照らす黄色い日差しは、この兵士が臆病風に吹かれ始めていることをほのめかしているし、今にも小屋全体を火に包みかねない脆い煙突は、彼の内なる世界が崩壊寸前であることを示している。

若者の心はひどく追い詰められていた。彼は戦場に来て初めて戦争というのが自分がそれまで考えていたものとはまったく異質なものであることを思い知らされたのである。彼が小さい頃から夢想していた戦争は、本で見知っていたようなギリシャ時代の血沸き肉躍るような戦闘であって、自分一人の活躍で大勢の人達の安全がしっかりと守られるといったような類のものであった。彼はそのような戦闘が自分の時代に存在するとは考えてもみなかったが、しかし国中が戦争の噂で持ち切りになると持ち前のロマンチックな憧れが甦ってきて、母親の反対を押し切って入隊してしまう。フラッシュバックで展開されるこの際の母親との対決は、おそらく彼にとって人生の最初の試練であっただろう。彼の戦争熱や愛国心に水を差すような母親の冷淡な態度に激しい反発を感じたものの、戦場に送り込まれてから激戦に直面する度に彼が思いを巡らせたのは、確信に満ちた母の言葉と単調で我慢ならなかった農場での仕事であった。

Craneの小説の中でも *The Red Badge of Courage* と同時代のものは何故か父親の存在感が希薄で、そのせいか母親の果たす役割だけが絶大である。ニューヨークのスラム街を背景にして書き上げられた *Maggie: A Girl of the Streets* と *George's Mother* (1896) においては、母親が互いに異なった性格を有しているにもかかわらず、子供達の成長に多大の影響を及ぼしているという点で共通するところがある。前者の Johnson 夫人は表向きは敬虔なクリスチャンを装いながら、昼間から酒を飲んで荒れ狂っているようなとんでもない母親だ。ところが後者の Kelcey 夫人は、かつては婦人禁酒同盟の闘士であったことから知れるように、信仰心の厚い女性で息子の George には実に厳格な躰をほどこしている。それなのに息子は自ら酒に溺れ破滅の道を選んでしまう。Mag-

gie の墮落や George の破滅を母親の無理解だけに求めるのはいささか性急に過ぎるように思えるかもしれないが、彼女たちに少しでも人の親としての自覚が備わっていたなら、子供たちの運命もまた大きく変わっていたかもしれないのである。

境遇はよく似ていても、これらの母親にくらべると Henry Fleming の母親には深い思いやりがある。彼女は息子が入隊の話をもちかけた時、彼が戦場よりも農場においてどれほど必要とされているかを綿々とうったえているが、彼が実際に入隊したことを告げると、かたくなに馬鈴薯の皮をむきながら、軍隊生活での注意事項を細々と教え込む。

“An allus be careful an’ choose yer comp’ny. There’s lots of bad men in the army, Henry. The army makes’em wild, and they like nothing better than the job of leading off a young feller like you, as ain’ t never been away from home much and has allus had a mother, an’ a -learning’ em to drink and swear. Keep clear of them folks, Henry. I don’t want yeh to ever do anything, Henry, that yeh would be’ shamed to let me know about. Jest think as if I was a-watchin’ yeh. If yeh keep that in yer mind allus, I guess yeh’ll come out about right.”³⁾

心の中で感動的な訣別の場面を予想していた Henry には期待はずれであったかもしれないが、息子を戦場に送り出す世の母親の気持ちの大方はこんなものだろう。だがそれだけに Crane の描く母親のイメージとしてはあまりにも紋切型でありすぎる。彼女には Johnson 夫人や Kelcey 夫人の持つあの強烈な個性がまったく感じられないのだ。しかし *The Red Badge of Courage* は先の両作品のように主人公の家庭環境に重きを置いた作品ではない。この小説が若い兵士の戦場におけるイニシエーションの物語であることはすでに定評がある。兵士の出発が紋切型であって悪かろう道理はない。この様な話に冒頭から母と子

の確執を思わせるような展開はかえって不自然である。

入隊した Henry は級友達に別れを告げるため学校へ行き、そこで特別待遇を受けてすっかりいい気持ちになる。この場面で“light-haired girl”と“darker girl”の二人の娘がどこか思わせ振りの形で登場しているので、⁴⁾ さては金髪と黒髪の女性の性格を使い分けるアメリカのロマンスの効用かと思われたが、これにはさ程の深い意味は含まれてはいなかった。やがて連隊に所属して首都に向かう途中で駐屯地に着く度にもてはやされるので、彼は自分が一戦も交えずしてすでに英雄になったような気分させられる。だがこの有頂天も連隊が戦地を転々とし始めてからは一気に冷めてしまう。教練と閲兵を繰り返しているうちに彼は自分が巨大な青い見世物 (a vast blue demonstration) の一部に過ぎないことを痛感し始める。一人前の兵士になるということは、その人間性を抹殺して組織の一部としてのみ機能する殺人機械に変えられるということだ。我々は今日でも小説や映画でその非情さを嫌というほど繰り返し見せつけられている。

「青い見世物」というのは、Henry の所属する北軍の軍服が青色なので連隊の壮大な行軍を称して付けられた呼び方であろう。これは後に John Ford が好んで監督した「騎兵隊もの」の映画を思い起こさせるが、視覚的効果を最大限に生かそうとしている点では共通している。Henry の観たものはそれほど勇壮で爽快な印象を与えてはくれない。彼は川の対岸で不気味に光る敵の赤い眼を無数の龍の眼球に譬えていたが、早朝の味方の連隊の行軍でさえも彼には夜の洞穴から這い出してきた大蛇のように思われたのだ。日が暮れて野原のあちこちに仲間の野営の火が焚かれる。その光景もまた悪魔的な効果を生み出して彼の不安をさらにかきたてる。一人でテントの中で休んでいても、千もの舌を持った怪物が暗闇の中で背後から突然彼に襲いかかってくるのである。

2

Henry がこのような不安と恐怖の幻影に取り憑かれるようになったのは、彼

が実際に実戦を意識するようになってからのことである。彼はこの戦場に来るまで自分が戦闘の最中に突然逃げ出すかもしれないなどということは考えたこともなかった。ところがこの思いがけない懸念が実戦の時間が近づくにつれて次第に大きくなってきたのである。先程の龍や大蛇の幻想もこのような不安定な心理状態から生み出されたものだ。そこで彼は連隊の仲間たちの中に自分と同じ心境の者がいないかどうかこっそりと探索し始める。場合によっては自分の立場がみじめになるばかりなので、相手構わずあからさまに相談をもちかけるわけにはゆかないからだ。しかし自分と同じ心境の兵士を見つけ出すことが出来なくて、彼はついには自己不信にまで陥ってしまう。次の引用文では連隊の他の兵士たちからだけでなく、自分自身からも遊離してしまった若い兵士の心情が巧みに語られている。

He lay down in the grass. The blades pressed tenderly against his cheek. The moon had been lighted and was hung in a treetop. The liquid stillness of the night enveloping him made him feel vast pity for himself. There was a caress in the soft winds; and the whole mood of the darkness, he thought, was one of sympathy for himself in his distress.⁵⁾

“The moon had been lighted and was hung in a treetop.” という表現にはどこか人の心を童心に導くような趣がある。それが黄昏どきの穏やかな雰囲気と相まって若者の気持ちを感じ傷的な気分に変えてしまったのだ。自分が兵隊向きに出来ていないことを悟らされると、若者は故郷に帰って農場での生活に復帰できることを心から熱望するようになる。

だが軍隊ではこのような気分浸りにおられる時間は束の間のことだ。行軍中にもいつ何時敵の襲撃を受けるかわからないし、悲劇的な視線を空に向けて一人瞑想にふけっていると、獣のような少尉の “Come, young man, get up into

ranks there. No skulking' ll do here”⁶⁾ という叱声が飛んで来る。進軍の辛さを呪い、上官の卑劣さと将軍たちの無能を非難しているうちに、彼はまた自分が所詮は「青い見世物」の一部でしかないことを思い出す。しかもその見世物は軍法の鉄則によって四方をしっかりと固めている。行軍中に倒れたら後から来る者が彼を踏んで行くだろう。彼はここに来て初めて自分が無慈悲な政府の力で戦場に狩り出され、なぶり殺しにされようとしていることに気付いたのだ。

人間は戦場では別人のようになることがある。若者も丘の彼方から大砲の轟きを耳にした時、何もかも忘れて猛スピードで土手を駆け登る。もし丘の向こうで激しい戦闘が展開されていたら彼はそのまま勢いにまかせてその中に突進していたであろう。だが自然の中でのこの突撃はあまりにも穏やかであった。そのために彼には再び瞑想の機会が与えられてしまった。この穏やかな風景の背後には敵の大群が潜んでいるかもしれない。自分たちは無能な司令官のために皆畏に掛けられてしまったのだ。若者はこんな不安や恐怖心に絶えず襲われるくらいなら一思いに死んでしまった方がましではなかろうかと考える。そうすれば自分の真価がやっと認められることになるから。ところが実際には彼は死というものについてまだ何も理解してはいなかった。行軍中連隊は兵士の死体に出くわしたことがあったが、彼はこの死体の周りを何度も歩き回ってその疑問の解答を得ようとして見事に失敗していたのである。

The Red Badge of Courage では、Henry Fleming の戦争体験にもとづく内面の記録が物語の中心となっているので、その過程を克明に辿ることが第一義だが、しかし彼の全体像を掌握するためには戦場における他の兵士たちとの人間関係をも十分に理解しておく必要がある。彼ら自身が Henry に多大な影響を及ぼしているからだけでなく、彼らの様々な反応を通して Henry の実像が浮かび上がってくるからだ。物語の冒頭で部隊の移動の噂をもたらしたのっぽの兵士 Jim Conklin は Henry と同郷で、二人は子供のころからの知り合いであった。Jim はいつも平然として落ち着きはらっているのに、戦場にきて大きな

悩みを抱え込むことになった Henry には常に鎮静剤のような役割を果たしている。Henry がいかにも冗談めかして “Think any of the boys’ ll run ?” と尋ねた時もそうだった。

Of course it might happen that the hull kit-and-boodle might start and run, if some big fighting came first-off, and then again they might stay and fight like fun. But you can’t bet on nothing. Of course they ain’t never been under fire yet, and it ain’t likely they’ll lick the hull rebel army all-to-oncet the first time; but I think they’ll fight better than some, if worse than others. That’s the way I figger.⁷⁾

仲間の兵士たちが皆大変な自信の持ち主なのではないかと恐れをなしていた Henry は、Jim のこの言葉を聞いて幾分安堵の胸を撫で下ろしている。

物語の冒頭からこの Jim と何かにつけて対立しているのが大声の兵士の Wilson である。彼は短気で喧嘩っばやい性格でかなり無理をして虚勢を張ってはいるが、内心は Henry と同じように臆病風に吹かれている。これは1・2章で展開される Jim と Wilson, Wilson と Henry のそれぞれの口論を比べてみると、一目瞭然である。Wilson の虚勢は Henry には効き目があっても、確固たる信念に支えられた Jim の反論にはまったく通用しない。Henry がまた例の「青い見世物」の論理を思い出して戦闘待機の状態に苛立ちながら不満を述べると、Wilson がそれに同調する。だがのっぼの Jim はそんなことはまったく意に介せず、黙々とサンドイッチを噛んでいる。Henry がすぐに戦死して悩みを解消したいと願っているような時でも、彼は機会あるごとに何か食べ物を取り出して食べながら、新しい環境や状況を冷静に受け入れているのである。それに比べると、Wilson の虚勢が露顕するのは早かった。彼はこともあろうに自分の方から Henry に弱みを見せてしまったのである。

“I’m a gone coon this first time and—and I w-want you to take these here thing—to—my—folks.” He ended in a quavering sob of pity for himself. He handed the youth a little packet done up in a yellow envelope.⁸⁾

Henry に手渡された小さな包みまでもが黄色とは随分念の入った話だ。戦場で仲間に弱みを見せることは Henry が特に気にしていたことだが、彼はこのことがあって以来 Wilson に対して気持ちの上で常に優位に立つことができた。

この段階で Henry に大きな影響を及ぼした人物としてはもう一人連隊の少尉がいる。この男は「軍隊もの」では絶対に欠かすことのできない鬼軍曹の役割を一手に引き受けることになる人物である。この少尉の名前が Hasbrouck と呼ばれている勇猛果敢な上官と同一人物であることが知れるのには例によってしばらく時間がかかる。Henry 自身は、瞑想に耽ってうっかり隊列を乱してこの少尉にこっぴどく痛めつけられて以来、彼を人の気持ちの理解できない獣みたいな男と思い込むようになっていたが、この二人の関係が戦場で激戦を体験していくうちに大きく変貌していくパターンは、今ではどこの国の「軍隊もの」でも定石になっている。

戦闘が始まると Jim Conklin が Henry に語ったように、彼らの連隊は敵の嵐のような砲弾を浴びて一斉に退却し始める。だがこれも Jim の予見した通り、何とか最後のところで踏み止まると今度は逆襲に転じる。Henry も突然自分自身への関心を失い、脅威に満ちた神を見ることすら忘れてしまって、あれほどおぞましく思っていた「青い見世物」の一員となる。しかもこの一つの欲望に支配されている共同体と合体し得たことに誇りすら感じているのである。彼が戦場の雰囲気の影響を受けていることは明らかだ。彼はこれまで敵の陣地の火を龍の赤い眼に、また自軍の行進の列を百足や大蛇に譬えたりして、戦争そのものを血に飢えた巨大な怪物のように考えていた。ところが戦場ではたちまちの内に彼自身が追い詰められた野獣のようになってしまっているのである。彼

の戦場における興奮状態は、時には苦痛から逃れようと身をもがき、時には絶望の仕種で頭を垂れる軍旗によって象徴されている。

The battle flag in the distance jerked about madly. It seemed to be struggling to free itself from an agony. The billowing smoke was filled with horizontal flashes.

Men running swiftly emerged from it. They grew in numbers until it was seen that the whole command was fleeing. The flag suddenly sank down as if dying. Its motion as it fell was a gesture of despair.⁹⁾

この軍旗が「嵐の中でも怯むことのない美しい鳥」¹⁰⁾のように思われるようになったころ、若者の心に再び穏やかな辺りの風景が甦ってくる。彼は再度、人間の悪行をものともせず輝き続ける太陽や、広く澄み渡った青い空に深く感動させられるのである。

かくして Henry は興奮状態から徐々に本来の自分の姿を取り戻すことになるのだが、これによって最大の試練を切り抜けることができたと思い込んでしまった彼の判断はいかにも甘すぎた。予期に反してまたしても襲いかかってきた敵軍は、虚を突かれた若者にとって以前と同じ赤と青の恐ろしい龍の群れと化す。それを目前にした彼は、眼を閉じて一呑みにされるのを待っている無力なひよこのようなものだ。このような状況の下では哲人の Parker Adderson だって逃げ出すより他にどうすることもできなかったであろう。Parker Adderson というのは、Crane とは違って南北戦争を実際に体験したことのある Ambrose Bierce によって書かれた *In the Midst of Life* に収められた短編小説の主人公である。彼は北軍の軍曹だが、スパイの容疑で南軍の将校の取り調べを受ける。だがスパイの処刑は翌日の絞首刑が慣例なので、そうと思い込んで鷹揚な態度で相手を手玉にとる。ところが思いがけずもその場で銃殺刑を宣告されてしまったので、突然凶暴になって荒れ狂う。人間は不意を突かれると

激しい恐怖心に襲われ、思いがけない行動に出ることがある。Henry が突然持ち場を放棄して逃げ出したのもこれと同じ理由によるものだ。

逃げ出したのは衝動的だが、逃げている間には様々な思いが脳裏を駆け巡る。何かの罪を犯したかのような後ろめたさだけが後に残る。ましてやこの戦いが味方の勝ち戦であったというからには仲間に対しても顔向けができない。Henry は人の声のように聞こえてくる銃声を避けて深い森の中へ入って行く。この森は冒頭の場面のテントの中と同じように彼の内なる世界を暗示している。しかしこの前の時とは違って、この内なる世界への道は蔓草が絡み灌木が咽ぶ大変な茨道である。まるで自然までもが彼の臆病を詰って、受け入れるのを拒絶しようとしているかのようだ。それでも彼はさらに暗く入り組んだ場所を求めて奥深く侵入し、その途中で自分にとっては極めて好都合な現象に出くわしている。リスに向かって松笠を投げるとリスは恐怖で泣き叫びながら必死になって逃げ出す。そして高い木の天辺まで駆け登ると、そこからそっと首を出しておそろおそろ下を見下ろしたのである。これが世の中の真理というものだ。自然は確固たる証拠をもって彼の主張を実証してくれたのである。

Henry はこれによってしばらくは心の安らぎを得ることができたであろうが、しかしこの森は必ずしも彼にとって心の休まる場所ではなかった。彼がさらに奥に踏みこんで行くと、高い枝がアーチの形で交差して礼拝堂のような雰囲気を造り出している所に辿り着いた。松葉が褐色の柔らかい絨毯となって、厳かな光がかすかに差し込んでいた。そこで彼は思いがけないものを目にするのである。

He was being looked at by a dead man who was seated with his back against a columnlike tree. The corpse was dressed in a uniform that once had been blue, but was now faded to a melancholy shade of green. The eyes, staring at the youth, had changed to the dull hue to be seen on the side of a dead fish. The mouth was open. Its red had changed to an

appalling yellow. Over the gray skin of the face ran little ants. One was trundling some sort of a bundle along the upper lip.¹¹⁾

Henry は行軍中に始めて死者に遭遇して以来戦死者の様々な姿を目にしてきたに違いないが、心の拠り所とも考えられていた自然が彼に提示したこの冷酷な実態は、彼の心の底に残存していたであろうロマンチックな心情を完全に払拭するものであった。これは一般に受け取られているように決して宗教的な意味合いにおいてのみ考慮されるべき問題ではない。彼はすでに黒い沼の中で一匹の小さな動物がきらきら光る魚をくわえて逃げ出す所を目撃していたが、その魚の腹を思わせるような眼とアリの這っている変色した唇とで、この死者は彼に何を訴えようとしていたのであろうか。そこには 20 世紀に入って大いに論じられるようになった実存哲学の根源が秘められている。だがこれはとても一兵士の手に負えるような代物ではない。自然が蔓草や灌木の手を借りてしきりに引き止めようとするにもかかわらず、Henry は恐ろしくなってあわててその場から立ち去っているのである。

Henry にはおそらく自然の礼拝堂の中の死者が何を意味しているかは分からなかったであろう。だがそれがその後の彼の性格に大きな影響を及ぼしたことは事実である。彼は森の中から外に出る時、大砲の炸裂する音を聞いて戦場の方へ駆け出して行く。あんなに苦勞して避けてきた所へ舞い戻って行ったのである。彼自身はこの自分の心境の変化を説明するのに、「もし地球と月がぶつかるようなことがあれば、大勢の人が屋根に上がってそれを見物したがるだろう¹²⁾ という陳腐な譬えしか思い付かなかったようだが、実際のところはもっと深刻であった。彼はこの時以来自分の立場と戦場の状況をより冷静に観察するようになり、戦争そのもののメカニズム(その複雑な仕組みや冷酷なプロセス)に魅せられるようになったのだ。それと同時に、自軍の行軍や敵軍の攻撃をむやみに大蛇とか龍に譬えたりして、戦争を怪物呼ばわりしなくなってきた。

3

戦場に立ち戻った時には闘いはすでに終わっていて、Henry は退却する負傷兵たちの群れに遭遇する。その時ボロボロの軍服を着て埃と血に塗れた兵士が、彼におそろおそろ声をかけてくる。Henry にとっては Jim Conklin に次いで重要な役割を果たすことになる人物である。このボロボロの兵士は、かつて Jim が予告していたことが実現したことを、あたかも Jim に成り代わって告げるかのように、Henry に話しかけてくる。

“Was pretty good fight, wa’ n’ t it?” he began in a small voice, and then he achieved the fortitude to continue. “Dern me if I ever see fellers fight so. Laws, how they did fight! I knowed th’ boys’ d like when they got square at. Th’ boys ain’t had no fair chanct up t’ now, but this time they showed what they was. I knowed it’ d turn out this way. Yeh can’ t lick them boys. No, sir! They’er fighters, they be.¹³⁾

この後彼は Henry の身を気づかって “Where yeh hit, ol’ boy?”¹⁴⁾ と尋ねている。ボロボロの兵士にしてみれば、これは同じ戦場で戦った仲間への労りの気持ちにすぎなかったのであろうが、戦う前に逃げ出してしまったことを後悔している Henry にはとても耐えられない言葉であった。Henry にとって Jim Conklin は戦場での臆病を解消して新たな勇気を与えてくれる存在であったが、この労りの言葉が仇となって、ボロボロの兵士は彼に罪の意識を呼び起こす道徳的な役割を負わされることになった。

一方ボロボロの兵士の質問のために自分の額に焼き付けられた罪の文字を過度に意識するようになった Henry は、周囲の負傷兵たちを眺めているうちに、自分も負傷して赤い勇気の証明 (a red badge of courage) を手に入れたいと望むようになる。丁度その時彼は負傷兵の中に灰色の顔をして血まみれになって歩

いている Jim Conklin の姿を見つけ出す。Jim は Henry の存在に気付くと “An’, Lord, what a circus! An’, b’ jiminey, I got shot—I got shot. Yes, b’ jiminey, I got shot.”¹⁵⁾ と言って、自分が何故撃たれたのか分からない様子で、この言葉をしきりに繰り返していた。Jim は Henry の視点を通して知る限り、Henry とは違って露営の時も交戦に臨んでも、決して心を乱すことなく任務に励んでいた。それがために迷いに迷っていた Henry の信頼を得ることになったのだが、この意外な言葉は、彼を支えていたものが、決して安心立命の精神によるものではなく、ある種の驕慢な性格故であったことを図らずも実証することになった。

Jim Conklin の性格が “The Open Boat”(1898) の給油係のそれとよく似ていることは衆目の一致するところだが、この二人はその死に様において極めて対照的な姿を見せている。荒波に翻弄されているボートの中で、コックと新聞記者がつまらぬ議論に花を咲かせていた時も、給油係はただ黙々とボートを漕ぎ続けていた。体力では他の誰よりも勝っていたように思われたその彼が、何故浜辺にうつぶせになって横たわる羽目になったのか。本人は無論のこと、作者もこれについては何の説明も付してはいない。ところが Jim の場合は、行動によってのみならず、言葉の中でも沈着で自信に満ちた態度を常に示している。それに臨終の場面で彼の取った行動は、後の読者に様々な解釈を生み出させることになった。あの礼拝堂のような森の中の出来事以来この小説では宗教的な雰囲気の色濃く醸し出されているが、Jim Conklin の死を Jesus Christ の殉教に見立てるような解釈は、少しばかり短絡的に過ぎるようだ。何事においても 19 世紀末のアメリカの伝統的な風潮に対して懐疑的であった作者が、そのような正面切ったの宗教的な解釈を容認する訳がない。もしそのような解釈が可能だとすれば、Jim の死に特別の意を込めていた Henry の意識を通してのみ許されることである。

それにしても Jim の臨終の光景は凄まじい。

He was invaded by a creeping strangeness that slowly enveloped him. For a moment the tremor of his legs caused him to dance a sort of hideous hornpipe. His arms beat wildly about his head in expression of implike enthusiasm.

His tall figure stretched itself to its full height. There was a slight rending sound. Then it began to swing forward, slow and straight, in the manner of a falling tree. A swift muscular contortion made the left shoulder strike the ground first.¹⁶⁾

この死の舞踏を思わせる Jim の断末魔の仕種も、一見宗教的な雰囲気醸し出しているように思えるが、その後の “As the flap of the blue jacket fell away from the body, he (Henry) could see that the side looked as if it had been chewed by wolves.”¹⁷⁾ という文章から判断しても分かるように、これは何よりも Jim Conklin 自身の恐怖と苦痛のなせる業なのである。いずれにしても Jim の死は Henry にとって重要な意味を持っている。少なくともこの場面では、これまで悩まされていた戦場での恐怖や敵前逃亡のために新たに生まれた罪の意識はまったく影を潜めていた。その代わりに生まれたのが遣り場のない激しい怒りの感情である。第9章の最後に出てくる “The red sun was pasted in the sky like a wafer.”¹⁸⁾ という一文は、“wafer” という語に「ホスチア」の意味もあるので、これまた安直なキリスト教的解釈を生む手掛かりとなるが、先に引用した “The moon had been lighted and was hung in a treetop.” などと同じ Crane 独特の鮮やかな心象風景の表現と受け取るべきである。

Jim の死によって Henry は大きな衝撃を受けたが、しかしそのために彼の性格がすっかり変わってしまったというわけではない。Charles C. Walcutt の述べているように、Henry の行動は常に絶望とか怒りなどの一時的な感情によって反動的に生み出されたものなので、決して安定した人間形成には到ってはいない。¹⁹⁾ Jim の死は確かに彼の性格に大きな影響を及ぼしたが、彼の人間性を完

全に変貌させるには戦争はあまりにも巨大かつ複雑でありすぎる。彼の傍らにはいつもボロ服の兵士が付きまとい、例のあのセリフで彼の罪の意識を刺激する。その兵士をやっとの思いで振り切っても、屈辱の思いが次々に浮かんで来ては彼の心を苛む。その度に彼は自らに対しても道徳的弁護 (moral vindication) を迫られることになった。それに敵軍の襲撃に対する恐怖も依然として根強く残っていて、戦争を血に飢えた赤い怪物と見なすあの譬えがまたしても甦って来る。

The fight was lost. The dragons were coming with invincible strides. The army, helpless in the matted thickets and blinded by the overhanging night, was going to be swallowed. War, the red animal, war, the blood-swollen god, would have bloated fill.²⁰⁾

だが戦争や軍隊を野獣や怪物に譬えるような幻想はこれを最後に Henry の脳裏からはすっかり消え去ってしまう。彼の戦場での恐怖感がかなり薄らいできたということであろうか。それに代わって生まれてきたのが、軍人としての意地であり、誇りであり、友情である。Henry の内なる世界では敵前逃亡を犯した罪の意識とこの軍人氣質との葛藤がこれからの物語の中心となる。その契機となる事件が集団で退却中の最中に起きている。敗走中の兵士から戦闘の状況を聞き出そうとするが、動転したその兵士によって小銃の台尻で頭を強く殴られる。殆ど消え行く意識の中で、彼は敬愛していた Jim の死の光景を思い出すと、彼が求めていた誰にも干渉されない隠れた場所を頭に思い浮かべる。これは彼が戦死者に対して抱いていた羨望の気持ちの表れであろう。彼が不安な気持ちになって一人で彷徨っていると、陽気な声の兵士が話しかけてきて、彼を自分の連隊にまで送り届けてくれる。彼の方は自分の世話を明らかに必要としていたボロ服の兵士を振り切って逃げて来たばかりだというのに。

このあたりでは Henry の倫理感が問われそうな出来事が頻出しているが、そ

れが決定的な事態にまで発展するのは次の13章においてである。Henryが連隊に帰ると、偶々大声の兵士のWilsonが歩哨に出ている、彼の帰隊を大喜びで迎え入れる。Wilsonの質問の内容が予め読めていたので、彼はその前に何かの口実をもうける必要に迫られた。Wilsonはあの黄色い紙包みの件で彼に負い目を感じていた筈だからましてのことである。そこでHenryは思わず“I got separated from th’ reg’ ment. Over on th’ right, I got shot. In th’ head. I never see sech fightin.”²¹⁾とありもしなかった嘘をついてしまう。Wilsonと後から加わった伍長は彼の傷の手当てをするが、特に前者は親身になって看病をしてくれるので、彼はまたしても新たな罪の意識に苦しめられることになる。

4

The Red Badge of Courage は全24章で構成されているが、これを前半と後半に分けるとなると、この13章までを前半と見なすのが妥当なところであろう。次の14章は第1章と同じような早朝の露営の雰囲気が始まる。

When the youth awoke it seemed to him that he had been asleep for a thousand years, and he felt sure that he opened his eyes upon an unexpected world. Gray mists were slowly shifting before the first efforts of the sun rays. An impending splendor could be seen in the eastern sky. An icy dew had chilled his face, and immediately upon arousing he curled farther down into his blanket. He stared for a while at the leaves overhead, moving in a heraldic wind of the day.

The distance was splintering and blaring with the noise of fighting. There was in the sound an expression of a deadly persistency, as if it had not began and was not to cease.²²⁾

この光景が第1章の雰囲気と大きく異なるのは、すべてがHenry個人の視点で

捉えられているからだ。Henry は一夜明けて千年の変貌を目の当たりにするが、変わったのは周囲の状況ではなくて、彼自身の意識なのである。これは明らかに眼から臆病という名の鱗が取れた人間の見た光景なのだ。自分の負傷の本当の原因について何も知らない兵士たちから持て囃されているうちに、彼自身の中でいつの間にか小さな自信の花が開き始めたのだ。これまで彼は自分が恐ろしい龍と戦ってきたのだと思い込んでいたのだが、その龍も想像していたほど恐ろしいものとは感じなくなってきたのである。

この得意の絶頂にある Henry を驚かせたのが大声の兵士の Wilson だ。彼は Jim Conklin と同じように Henry の同郷で、少なくとも河岸で露営をしていた頃は、臆病なくせに見栄っ張りで、おまけに喧嘩好きな兵士だった。しかし Henry はこの戦友の人間性が大きく変わっているのを認めざるを得なかった。自分が世話になったという理由を斟酌しても、どことなく立派で頼りになる人物に変身していたのである。Eric Solomon は “The loud soldier, Wilson, a foil to Henry’s fears at the start, undergoes a similar, and even more rapid, growth to manhood through the ordeal.”²³⁾ と述べているが、この言葉の意味は Henry と Wilson の試練を比較してみるとよく分かる。この二人の兵士が戦場での体験で恐怖心を克服し、人間的にも成長してきたことは、すでに述べた通りである。だが彼らの内には互いに軍人として恥辱的な秘密が隠されていた。Wilson には例の黄色い紙包みの件があり、Henry には敵前逃亡と偽りの戦傷の屈辱があった。この二人だけの間柄で言えば、Wilson は Henry の秘密に気づいてはいないが、Henry は Wilson から紙包みを託された本人なので相手の立場はよく分かっている。それ故彼は Wilson に対してすごく優位に立ったような気になって、これからは優しい態度で接してやろうと思うようになる。

現にその後で Wilson があの紙包みの返却をおずおずと申し出た時、Henry は寛大な気持ちでそれを相手に返してやりながら、自分の心が次第に強く逞しくなっていてゆくのを感じている。しかし彼がこのような精神の高揚を感じることができたのはここまでであった。Wilson は自分の恥辱を公開することによって

苦悩の根源を払拭しようとしたのだ。その一瞬は大変な屈辱を味わったかもしれないが、後に名誉回復の機会はいくらでもある。だが Henry の秘密は依然として彼の心の奥底に秘められたままである。彼は Wilson とは逆に告白の時期を逸してしまい、そのために *The Scarlet Letter* の *Arthur Dimmesdale* 牧師のように、人知れず罪の意識に悩まされることになる。のっぽの兵士の Jim Conklin と “The Open Boat” の給油係の性格が類似していることはすでに述べた通りだが、この Wilson と Henry の関係は同作品のコックと新聞記者のそれを想起させるものがある。“The Open Boat” ではコックと新聞記者のたわいない口論がプロットの展開に大きく貢献していたように、*The Red Badge of Courage* では Henry と Wilson の戦場での友情と武勲争いが後半のプロットの中心をなしているのである。

すっかり気持ちの整理をつけてしまった Wilson とは対照的に、Henry は「勇気の赤いしるし」が象徴する互いに背反する二つの意識に翻弄されることになる。Dimmesdale 牧師の胸に焼きついた緋文字のように、その名誉が賞賛されればされるほど、自責の念も強くなる。うっかり威勢のいいセリフを吐いて、誰かに反論でもされたら、彼の心中はすぐにも波風が立つ。だが幸いなことに、戦場では他人の内面を詮索するような余裕はなく、また自責の念に囚われている暇もない。頭の傷は不名誉な来歴を秘めてはいるが、それでも彼はすでに現場で体験を積んだ立派な兵士である。すでに述べたように、軍人としての意地と誇りと友情はしっかりと身につけていた。自軍の青色の戦列が敵によって踏みつけられた蛇のようにのたうち回っているのを見ると、彼は激しい憎悪に我を忘れて銃を撃ちまくり、あの鬼のような少尉を感心させている。鬼と言えば、彼自身がすでに戦争の鬼と見なされるようになっていた。いつの間にかあれほど軽蔑していた少尉と同質の人間に生まれ変わっていたのだ。

一度 Henry と Wilson が二人だけで水を汲みに出かけたことがあった。川が見つからなかったので本来の目的は達成できなかったが、隊に戻る途中で彼らは自軍の将校と将軍が立ち話をしているのを盗み聞きする。作戦本部は苦戦を

強いられている様子で、連隊の遣り繰りにもひどく難儀しているようであった。だが “I had to order in th’ 12 th to help th’ 76 th, an’ I haven’t really got any. But there’s 304 th. They fight like a lot’ a mule drivers. I can spare them best of any.”²⁴⁾ と、自分たちの連隊をまるで将棋の駒でも動かすように簡単にあしらう将校の態度と、“I don’t believe many of your mule drivers will get back.”²⁵⁾ といとも気楽に言っている将軍の非情さは、やっと軍隊なれしてきた二人の兵士にも大変な驚きのようであった。とくに戦場ではほんの僅かの体験で数多くの教訓を詰め込まれて、いささか増長気分になりかけていた若者には、これはまさに取って置きの衝撃であった。

And the most startling thing was to learn suddenly that he was very insignificant. The officer spoke of the regiment as if he referred to a broom. Some part of the woods needed sweeping, perhaps, and he merely indicated a broom in a tone properly indifferent to its fate. It was war, no doubt, but it appeared strange.²⁶⁾

これが戦争というものだ。将校にとって連隊は森の一部を掃除するために必要な箒にすぎない。何時の世の戦争においても兵士たちをめぐる状況は不変である。Henry がこのような認識に到達した時、彼もまた凡百の戦記小説のヒーローたちの仲間になる。

死の淵で生まれた兵士同士の友情、兵を消耗品としか考えていない将軍たちへの不信、鬼のように恐れられた上官と兵士との意思の疎通。これらの条件が備わった段階で、*The Red Badge of Courage* の物語は一気にクライマックスに向かって突っ走る。第19章から最後の24章までは一進一退を繰り返す戦闘場面の連続である。そのなかで中心に描かれているのが大声の兵士 Wilson と Henry Fleming との友情の物語だ。二人は互いに敵の銃弾に倒れた旗手に代わって軍旗を死守し、連隊全体の士気を鼓舞する。戦場では Wilson はその名前

を喪失し、大声の兵士というあだ名も返上している。彼は Henry にとっては最も信頼に足る戦友であり、武勲を競える唯一の戦友となっていた。一方 Henry もまた戦闘中は内に秘めたあの罪の意識に悩まされることなく戦いに専念することができたのである。

5

Henry は実戦に揉まれているうちに兵士として著しい成長を遂げているが、しかし彼はまだ経験の浅い新参者である。自分では大変な手柄と思い込んでいたことが、古参兵たちからは取るに足りない戦果として嘲笑されることにもなる。一度は頭に来て相手構わず殴りかかりたい衝動に駆られるが、冷静に状況を眺めているうちに、自分が大袈裟に推測していたのに比べると、実際の距離と時間は滑稽なくらい僅かなものに過ぎなかったことに気付く。真実は依然として瘦せこけて日に焼けた古参兵たちの側にあっただけだ。しかしそれでも当初に比べると戦場における Henry の内面は大きく変化してきている。彼は最早恐怖心に駆られて自軍の行進を巨大な爬虫類に譬えたり、敵軍の襲来を「赤と緑の怪物」に準えたりするようなことはしなくなっていた。連隊の無能な指揮官への怒りと繰り返し襲ってくる敵軍への憎悪などのため、彼の心理状態は絶えず激しく動揺しているが、戦況を見つめる彼の眼は冷徹で一寸の狂いもない。

It seemed to the youth that he saw everything. Each blades of the green grass was bold and clear. He thought that he was aware of every change in the thin, transparent vapor that floated idly in sheets. The brown or gray trunks of the trees showed each roughness of their surfaces. And the men of the regiment, with their staring eyes and sweating faces, running madly, or falling, as if thrown headlong, to queer, heaped-up corpses—all were comprehended. His mind took a mechanical but firm impression, so that afterward everything was pictured and

explained to him, save why he himself was there.²⁷⁾

The Red Badge of Courage における戦闘場面の描写が定評のあることはすでに述べた通りだ。前半に見られる臆病風に吹かれた主人公の眼に捉えられた印象主義的な表現と、19章あたりから一気にクライマックスに向けて展開されたりアリストテリックな描写の使い分けには、作者の周到な構成力を感じさせられる。絵画的なイメージを駆使することに卓越した腕を持つ Crane のことだから、前者の場合は驚くに足りないかもしれないが、実戦の体験のないことを考えれば、後者の息をも吐かせぬ戦闘場面の連続には、目を見張らされるものがある。この点についてはこれまでも様々な議論が噴出しているが、Crane 自身はこれに関連してある書簡の中で次のように語っている。

They all insist that I am a veteran of the civil war, whereas the fact is, as you know, I never smelled even the power of a sham battle...Of course, I have never been in a battle, but I believe that I got my sense of the rage of conflict on the football field, or else fighting is a hereditary instinct, and I wrote intuitively; for the Cranes were a family of fighters in the old days. And in the Revolution every members did his duty.²⁸⁾

前半で多用された印象主義的なイメージに比べると、後半で使われているのは遙かに直截的で、力学的とでも言えるようなダイナミックな手法である。Crane の家系に尚武の気風が受け継がれていたかどうかは定かでないが、彼がフットボールに熱中していた時期は確かにあった。フットボールのゲームだけではない。陸上競技やレスリング、ボクシングなどあらゆるスポーツの持つ躍動感が、戦場の兵士たちの行動の中に取り込まれているのである。

このような Crane 自身の主張に加えて、この若い作家の偉業に過去の遺産の影響を指摘する批評家の意見がある。当然のことながら、「用いられる過去 (the

usable past)」はアメリカ本国の文人達から、Zola, Stendhal, Tolstoy, Homer など海外の著名な文豪にまで及んでいる。だがそれ以上に大きな影響を及ぼしたのが彼の故郷の無名の老兵たちだ。Crane の少年時代は南北戦争の終結からまだ十数年しか経ってはいなかった。彼がそのころ転々としたニューヨーク州のポート・ジャーヴィス周辺の町々には Henry Fleming のような歴戦の雄たちがたむろしていたのである。Crane 自身もまた “The Veteran” に登場する Jimmie 少年のように、大人の仲間入りをして、彼らの手柄話に熱心に耳を傾けていたに違いない。行軍の煩わしさ。初めての戦闘体験で盛り上がった士気と迫り来る死の不安。指揮官の作戦に対する不満や仲間の兵士達との友情。苦闘の末に勝ち得た初手柄。Crane が *The Red Badge of Courage* の中で、主人公の若い兵士が体験することになったエピソードの出所の多くをここに求めていたとしても、何の不思議もない。

“The Veteran” という作品は *The Red Badge of Courage* の翌年に出版された短編小説である。Balzac や Faulkner ほど大掛かりではないが、Crane も一度使った人物を別の作品で再登場させる傾向があり、“The Veteran” では Henry Fleming の老後のエピソードが紹介されている。この作品自体は大した出来ではないが、*The Red Badge of Courage* の “a kind of gloss”²⁹⁾として読むと、結構得るところの多い小説である。南北戦争の体験者である老 Henry は、町の人達の要望に応じて戦場での手柄話を話しているうちに、“Mr. Fleming, you never was frightened much in them battles, was you?”³⁰⁾ という思いがけない質問を投げかけられる。この質問は *The Red Badge of Courage* の第1章で臆病風に吹かれ始めた Henry が戦友の Jim Conklin に向かって、“Did you ever think you might run yourself, Jim?”³¹⁾と尋ねた場面を思い起こさせるが、そのことにはまったく言及しないまま、老兵は次のような対応を示している。

The veteran looked down and grinned. Observing his manner, the

entire group tittered. "Well, I guess I was," he answered finally. "Pretty well scared, sometimes. Why, in my first battle I thought the sky was falling down. I thought the world was coming to an end. You bet I was scared."³²⁾

老兵の心の中にかつての若き日の思い出が甦っていたかどうかは不明である。だが我々読者には、彼の過去の体験の記憶があるが故に、この場面での彼の思いやりのある態度が一層味わい深く感じられるのである。

ところが孫の Jimmie にとってはこれはまったく意外な展開であった。日頃から敬愛していた祖父がこんなスキャンダラスなことを公言するなどとは夢にも思っていなかったからだ。彼は自分の気持ちを察知して宥めにかかっている祖父に対してあからさまに非難がましい態度を見せる。Crane 自身は少年のこの反発を、彼の幼稚な理想主義が傷つけられたからだと説明しているが、この幼稚な理想主義は若き日の Henry Fleming を戦場に駆り立てる原動力となっていたものである。自分の功名心などはすっかりなくして、しきりに曾ての戦友であった Jim Conklin の武勇を褒めそやす Fleming 老人。その心情を少しも思いやることが出来なくて、祖父の言動に不満の意を表す Jim。おそらくこの Jim という名前も祖父の手を介して Conklin から譲り受けたものに違いない。偶然のなせる業とはいえ、この巡り合わせには深いアイロニーが秘められている。

The Red Badge of Courage の最後の場面で、Henry Fleming は敵の軍旗を奪い取り、味方を勝利に導くという大変な手柄を立てている。これはプロットの展開から読者にも容易に推測できることではあるが、しかし動機そのものはかなり複雑である。彼が入隊する前に抱いていたようなギリシャ時代のロマンチックなヒロイズムは、戦場に赴く行軍中に早くも消滅していたし、教練でたたき込まれた敵への憎悪もすでに薄れてしまっていた。考えられるのは、自分たち連隊の兵士を“mule drivers”と呼んだ将校への報復か、戦友との先駆け

争い。あるいは彼を戦場から逃亡させたのと同じあの御しがたい本能的な衝動なのか。いずれにせよ戦場の興奮状態のなかから抜け出して、周囲の状況について冷静に判断できるようになった時、Henry は自らの戦場での功績に深い自信を抱くようになる。だがそれと同時に、心の中をいつも覗きこまれているように感じていたあのボロ服の兵士の記憶も甦ってくる。

For a time this pursuing recollection of the tattered man took all elation from the youth's veins. He saw his vivid error, and he was afraid that it would stand before him all his life.³³⁾

この記憶のある限り Henry Fleming の目前の榮譽は常に見えざる欺瞞によって苛まれることになるであろう。ところが Crane には Hawthorne や Joseph Conrad のように主人公の内に秘められた罪の意識に対する関心はあまりなかったようだ。この問題については彼は Henry の心境を次のように転換させることによって巧妙に遠ざけている。

Yet gradually he mustered force to put the sin at a distance. And at last his eyes seemed to be opened to some new ways. He found that he could look back upon the brass and bombast of his earlier gospels and see them truly. He was gleeful when he discovered that he now despised them.³⁴⁾

こうして Henry は自力で罪の意識を排除すると、自らの成長に大きな自信を抱くようになる。彼はこれからはどんな命令を受けても怯むようなことはないであろう。死というものは結局はそれほど恐れるに足りぬものなのだから。Crane は Henry Fleming を罪の意識に苦悩する Arthur Dimmesdale 牧師や Lord Jim の仲間に加える代わりに、東の間のヒロイズムに酔い痴れる戦場の立役者

に仕立て上げているのである。

6

The Red Badge of Courage の最終章についてはこれまでも批評家達によって多くの論議が戦わされてきた。とりわけ次に引用する最後の一節を巡っては実に様々な解釈がなされている。

It rained. The procession of weary soldiers became a bedraggled train. despondent and mattering, marching with churning effort in a trough of liquid brown mud under a low, wretched sky. Yet the youth smiled, for he saw that the world was a world for him. Though many discovered it to be made of oaths and walking sticks. He had rid himself of the red sickness of battle. The sultry nightmare was in the past. He had been an animal blistered and sweating in the heat and pain of war. He turned now with a lover's thirst to images of tranquil skies, fresh meadows, cool brooks—an existence of soft and eternal peace.

Over the river a golden ray of sun came through the hosts of leaden rain clouds.³⁵⁾

これを額面通りに受け止めて、戦場での若い兵士の成長を「教養小説」あるいは「入門神話」の範疇の中で処理しようとするもの。さらには兵士の一時的な興奮状態あるいは思い上がりと見て、作品の中に貫かれているアイロニカルな姿勢を強調しようとするもの。その他にもこれらの解釈の折衷的なものや、この章そのものをアンチ・クライマックスと見なす解釈もある。いずれの解釈もそれなりの理由付けがあり、説得力もある。要は *The Red Badge of Courage* という小説が、それほど多様な解釈を含み込む内容の豊かな作品であるということなのであろう。

それにしてもこの最後の場面のいかにも思わせ振りの描写にはやはり些かの疑念が残る。主人公の心象風景を表す手段として太陽或いは日光を用いる例はこれまでも幾つかあった。第1章で日光に照らされて黄色い光を放っていたテントの屋根は、臆病風に吹かれた Henry の内面の不安を象徴していたし、第9章でも Jim Conklin の壮絶な死に様が彼の意識に強烈な印象を植え付けることになり、その心象風景が“The red sun was pasted in the sky like a wafer.”というあの強烈な一文となって表されている。なかでも5章と17章では、最後の24章と同じように、章の最後の場面で金色に輝く日光の描写が見られる。これらの章で共通していることは、激しい戦闘を終えて意気高まる Henry の雄姿が、日光によって照らし出されているということだ。しかも章の最後で Henry が日光の中に立つという光景は、いつも彼が戦場で勇敢に戦い、自らの働きを自負する場面の直後に置かれているのである。

このような展開から判断すると、どうしても著者が戦場における主人公の成長を手放しで賞賛しているような印象が生まれてくる。Henry Fleming の物語を、「教養小説」ないしは「入門神話」の系列の中に加えようとする読者は、当然この印象を前面に押し出すことになるであろう。だが実際には各章の日光の描写は、その時々主人公のきまぐれな心情を反映しているだけで、個々には何の関連性もない。第5章で初めての戦闘の後 Henry が痛感したのは、人間の必死の状況に対してあまりにも無関心な自然の営みであった。

As he gazed around him the youth felt a flash of astonishment at the blue, pure sky and the sun gleaming on the trees and fields. It was surprising that Nature had gone tranquilly on with her golden process in the midst of so much devilment.³⁶⁾

この点では次の17章も同様だ。自分が大変な障害を克服した英雄なのではないかと思ひ込むほど思い上がっているにもかかわらず、彼の視点を通して語られ

ているのは、“Each distant thicket seemed a strange porcupine with quills of flame. A cloud of dark smoke, as from smoldering ruins, went up the sun now bright and gay in the blue, enamelled sky.”³⁷⁾という誠に客観的な描写だけである。

それに比べると、最後の章の一節での主人公の過剰な自信と、あたかもそれを祝福するかのような金色の日差しの効果は、あまりにも出来すぎている。あの最後の一文は、若い兵士の心象風景と解することが可能な反面、作品全体の帰結の言葉として、物語全体の流れの中で読み取る方が意義深いようにも思える。尤も、だからといって、私としては前者の読み方を否定するつもりは毛頭ない。だがその場合、主人公の心情と金色の日差しの関係には何の必然性も生まれてはこないで、それだけ主人公の自信と自惚れに対するアイロニカルな色合いが濃くなっていく。この場面では、主人公のヒロイズムが強調されればされるほど、物語はアンチ・クライマックスの方向に向かうことになるのである。作者の本当の狙いも案外このあたりにあったのかもしれない。

註

- 1) Stephen Crane, *The Red Badge of Courage and Selected Prose and Poetry* (New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1965), p. 238.
- 2) *Ibid.*, p. 240.
- 3) *Ibid.*, pp. 242-243.
- 4) *Ibid.*, p. 244.
- 5) *Ibid.*, p. 254.
- 6) *Ibid.*, p. 262.
- 7) *Ibid.*, p. 248.
- 8) *Ibid.*, p. 265.
- 9) *Ibid.*, p. 268.
- 10) *Ibid.*, p. 276.
- 11) *Ibid.*, p. 286.
- 12) *Ibid.*, p. 287.
- 13) *Ibid.*, p. 291.

- 14) *Ibid.*, p. 291.
- 15) *Ibid.*, p. 293.
- 16) *Ibid.*, p. 296.
- 17) *Ibid.*, p. 297.
- 18) *Ibid.*, p. 297.
- 19) Charles C. Walcutt, "Stephen Crane: Naturalist", Donald Pizer (ed.), *The Red Badge of Courage* (New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1994), p. 209.
- 20) Crane, *op. cit.*, pp. 307-308.
- 21) *Ibid.*, p. 314.
- 22) *Ibid.*, p. 319.
- 23) Eric Solomon, *Stephen Crane: From Parody to Realism* (Cambridge: Harvard University Press, 1965), p. 82.
- 24) Crane, *op. cit.*, p. 341.
- 25) *Ibid.*, p. 341.
- 26) *Ibid.*, p. 341.
- 27) *Ibid.*, p. 344.
- 28) Stanley Wertheim and Paul Sorrentino (eds.), *The Correspondence of Stephen Crane* (New York: Columbia University Press, 1988). p. 322.
- 29) Milne Holton, *Cylinder of Vision: The Fiction and Journalistic Writing of Stephen Crane* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1972), p. 116.
- 30) Crane, *op. cit.*, p. 376.
- 31) *Ibid.*, p. 248.
- 32) *Ibid.*, p. 376.
- 33) *Ibid.*, p. 374.
- 34) *Ibid.*, p. 374.
- 35) *Ibid.*, p. 375.
- 36) *Ibid.*, p. 276.
- 37) *Ibid.*, p. 338.